
今日は何の日？？

アザゼル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日は何の日??

【Zコード】

Z7889D

【作者名】

アザゼル

【あらすじ】

なんだか不機嫌そうな彼女。彼女の口から出た言葉は「今日は何の日か覚えているか??」「はたして何の日だったのか追伸描写などを修正をしました」一度見た人ももう一度みてみると嬉しいです。

(前書き)

皆さんからもった指摘を元に修正を加えてみました。

感想よろしいお願ひします m(—_)m

川辺の土手を一人でそろつて歩いている一組の男女。

うつむきながら歩いている左目に眼帯を着けている少女

その少女に必死に声をかけている少年

どうやらケンカのようだな

さてさてこれからどうなるか見物だね

「……」

無言で顔を下に向けながら歩く彼女。

「なあ～」

ずっとその隣で一緒に歩いている俺なのだが……

「何?..?」

と返事を返してくれるものの上の炎とこつた感じでこわいから生
返事ばかり……なぜ?

「なんか怒ってるのか?」

とトを向いている彼女の顔を覗き、み表情を確認しようと俺

「なんで?..?」

と覗き込んだ顔をそむける彼女。

少し顔が赤かったような気が…

「いや、別に…」

「なら余計なことを聞くな

と俺を置いて早歩きでスタスターと歩く彼女。

(う~んなんだろうなあ~)

と腕を組み考へてみるのだが…
(やつぱり何もした覚えないんだけどな~
いや、覚えていない事自体に問題があるのか?)

正直全く覚えがない…

いつもは彼女にこんなに慎重に接する」となんてないのだが今日は少し事情がある。

その事情を知るには少し前にさかのぼらないといけない。

そう、それは今日の学校の帰り道での話だ。今日もおもしろくもなんともない授業を終えてウキウキ気分で帰ろうとしたところ

俺の元に一本の電話が掛かってきたのだつた

電話自体は仲のいい友人からの電話だったのだが内容が少々問題だつた。

電話の内容はこんな感じだ

「もしもしー。」

「おーお今ビリョウー。」

「今、学校でたとこだけど…ビリした？」

「いや、大したようじゅねんだけど…
お前の彼女のことなんだげーさー。」

「それがどうかしたか？」

「今、すれ違ったんだよ、チラッとしか見てないからよくわかんな
かつたけど左田に眼帯してるから間違いないと感づ。」

「それで彼女がどうかしたのか？
すれ違つて感じ普通あるだろ。」

まあ現に学校の帰りはいつも待ち合わせをして帰つてゐる……

「こや今田はこつもと様子明らかにおかしかつたんだよ」

「例えば？」

「説明しずらいけど下向いてボソボソ独り言つたり…
背中から黒いオーラが出てたり…
とにかく変だつたんだよ」

「なんだよそれ」

「どうあえず、急いで行ってやったほうがいいんじゃあないか？一緒に帰つてんだろ？」「

「まあな…

わかつた急いで行つてみるよ」

「まあ喧嘩にならんよ」とさりげなく

と不吉な警告を受けた俺は急いで彼女との待ち合わせ場所へと向かつたわけだ。

「…………

で今に至る訳だ。

「…………

「おい

と先に歩いている彼女が背中を見せたまま口を開いた。

「ん？」

「どうした？」

「今日何の日か覚えてるか？？」

と何かのなぞかけをしてくる彼女。

(……今日？…何か約束でもしてたかな？…)

「どうだ？？」

覚えてるか？？」

と少し強めの口調で聞き返していくが…

「……すまん、覚えてない…」

俺は少し申し訳ないが正直に答えた。

「……そつか…」

と肩をすぐめ明らかに残念がっている彼女。

うわ～なにか分からないけど
すつごい悪い事したみたいだ
何とかしないと…

「……あのを～」

と先に歩く彼女の肩を掴むと…

「……なに…」

とすうござい怖い顔をして返してくれる彼女

だからなんで怒ってるんだよ
俺、何か悪いことしたか~

「今日どうか遊びに行く約束してたっけ~?」

と恐る恐る聞いてみると……

「本当に覚えてないのか??」

今度は怒つてこむところよりも呆れていのに近い表情だった。

「そんなに大事な日か?」

「私にとつてはどうでもこい日だけど、君にとつては大事な日だ。」

(俺にとつて大事な日?)

と答えたが浮かばず考へ込んでくると……

「鈍いな~

今日は君の誕生日だね~!」

と呆れながらため息をつく彼女。

思ひ出したか??

(……誕生日…俺の…!?)

「ね、今思い出した。」

そつか俺の誕生日か~

で、なんで彼女が怒つてる訳?

「はあ~

せつかくプレゼントも用意したのに……ボソボソ」

おお~祝ってくれるつもりだったのか~

人の気も知らないでとか、なんで自分の誕生日位覚えてないのよとか色々な罵倒が聞こえてくる気がする……
てか聞こえる。

…「めんなさい、本当に自分の情けなさに涙がでできまやすよ。
わ~

ん!?

でも確かプレゼントついて

「マジ!?

プレゼント用意してくれてんの?」

と嬉しさのあまり少し大声で聞いてしまった。我ながらカッコ悪

「いや……めんな喜ぶよつなのじや……」

と彼女は声がどよどよして、顔はワインのよつて真っ赤になつて

いた。

ヤバいすつごい可愛い
その顔は反則だつて

「ありがとうその気持ちだけでも嬉しいよ。」

と一応、笑顔で返しておく。

「……で……だな……今日の夕食は一人で……しよう……と……」

そこまで言つて顔を下に向けてしまった。

もしかして最初に顔そむけたり顔赤かったのつて
これ言つのに緊張してたからとか……

「どうした？？
顔がにやけてるぞ」

不思議そつに俺の顔を眺める彼女

ヤバい、ヤバい

彼女に指摘されて初めて自分の顔がトテツもないぐらーやケてい
ることに気付いた

「いや、なんでもないで夕食じりあるへ。
どつか食べにでも行くか？」

とたずねると

「いや、料理は私が……」

ヒカツモヨツモヒカリに顔を真つ赤にしながら小声でこたえた。

「うう～ 可愛い～

ヒカツモヨツモヒカリに強気なにこいつ時だけこんな態度をとるのは
反則だと思つのは俺だけか？

「じゃあ帰りに材料買ひに行こぜ。
とびきりつまい料理作ってくれよな。」

と照れを必死に隠しながら俺は彼女の手をこじりしめ歩きだした。

いや～良いものを見せてもらひつたよな～

…ん???

俺が誰かつて???

出てきてただろ電話の時こ……そつそつ、あの時

おもしろいのが見られると思つてひいてみたんだよ

あこつこは内緒で頼むよ

いやマジで……ばれたらい殺されやうだしな……アハハ

(後書き)

どうだったでしょうか??

前の方が良かったとか

まあ今回の方がちょっとはマシになつたよとか
相変わらずダメダメですねとか
とにかく感想等待つてます

まだまだ色々手探り状態の自分ですが温かい日をお願いします m(

| |) m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7889d/>

今日は何の日？？

2010年12月14日21時06分発行